



民族集団が大西洋を渡り、それぞれ定住した。¹ その頃、太平洋側から中国人を主力としたアジア人が、海を渡ってカナダに移住し、日本人移民がカナダに上陸したのは1877年であった。

カナダの日本人移民の第一人者と言える人は永野という姓の人で、1853年11月、長崎県に生まれた。1877年3月、当時、太平洋航路をとる船が長崎に停泊しており、永野は船長に、船で働くことを条件に乗船させてほしいと志願し、許可された。

永野氏がカナダに上陸してから、およそ20年の間に、日本人移民数は出稼ぎに行く単身の男子集団を主として、続々と増えてきた。19世紀末から20世紀初頭は、日本人移民は男子が圧倒的に多かった。原因は極めて単純で、男たちは日本国内で仕事が見つからず、たとえ職を得たとしても、低賃金で家族を養うこともできないからであった。カナダに出稼ぎにきた日本人は、未婚の男性たちが多かったが、既婚・未婚を問わず男たちは単身でカナダを目指したのである。その男たちは、親に仕送りをし、妻子を飢えさせないために、数年間の予定で、ブリティッシュ・コロンビアに赴いたのである。

(二) 中期のカナダ日系人

20世紀に入る頃から、カナダへの日本人移民は急速に増えていく。1907年に、東京移民会社は約1500人の日本人をカナダへ送った。そのほとんどは、バンクーバーに行くこととなった。カナダ日系移民について著書のある末永氏²によると、この時期の日本人移民は主にブリティッシュ・コロンビア州の3箇所に勤めていた。

1 吉田忠雄『カナダ日系人移民の軌跡』(人間の科学社 2003年)
2 末永國紀 著書:『日系カナダ移民の社会史—太平洋を渡った近江商人の末裔たち』(ミネルヴァ書房 2010年) など

それらは、カナダ太平洋鉄道会社、ブリティッシュ・コロンビア州内の石炭鉱山とウェリングトン石炭会社である。バンクーバーを中心として、ブリティッシュ・コロンビア州の日本人移民は、こうして徐々に増えてきた。

第二次世界大戦に入ると、カナダ日系人の生活が大きく変わる。アン・ゴーマー・スナハラ(Ann Gomer Sunahara)が書いた『The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians During the Second World War』(Toronto, 1981)の中で、戦争中のカナダ日系人が遭った拘留、強制移動や監視付き生活を詳しく述べている。

戦時中のカナダ日系人の生活状況についての研究著作は、アン・ゴーマー・スナハラやケン・アダチ(Ken Adachi)『The Enemy that never was; A History of the Japanese Canadians』(Toronto, 1976)があり、詳しく非常時期のカナダに滞在する日系人の活動を述べている。また、日本語で公開されたものでは、新保満氏の『石をもて追われるごとく—日系カナダ人社会史』(大陸時報社、トロント、1975年刊)、『カナダ日本人移民物語』(築地書館、1986年刊)が詳しい。さらに近年、日系人の間で、自分の体験記録をまとめたものが数多く公開されている。

1989年6月、オタワにあるカナダ政府は、カナダ全土に以前から住む日系人に、証書のような手紙を送った。それは、カナダの首相が公式にカナダ日系人に謝罪した公文書であった。たった一通の証書だが、カナダ日系人にとっては、特別な意義を持っている。戦時に屈辱を受けた日系人にとっては、何よりの慰めであったことだろう。

日欧における住宅用台所の近代化過程に関する研究



須崎 文代

(工学研究科建築学専攻 博士後期課程)

近現代の家庭生活は、産業革命以降、グローバルに展開した近代化の影響を受けて大きく変容した。なかでも台所は、住宅内の他室に比べて、近代化過程のなかでも機能が多様化し、設えも大きく変化してきたのである。こうした台所の近代化に関する先行研究は、主として現象的な観察の中での議論に限られており、変容の要因や

社会的影響関係などの動向については残念ながら殆ど明らかにされていない。そこで、私は住宅用台所の近代化過程を明らかにする研究に取り組んでいる。現在、戦前期の台所の近代化には、建築関係者に限らず家政学関係者が深く関係したことに注目し、家政書から読み取れる台所改良論を中心として、衛生論や能率論などの理論が

導入される過程を検討している。そこでは、各専門家が欧米に学んで持ち込んだモデルが素地となり、また1920年代以降に展開したモダニズムの影響を受けている。今回の調査は、こうした日本の台所の近代化過程に影響した事物について、フランスにおける非文字資料を含む台所関連資料の分析および視察を行うものである。

今回の派遣調査は2012年10月19日より同年11月7日にかけて、フランス国立高等研究院においてジョセフ・キブルツ教授の御指導のもとに調査研究を行った。調査方法は、①生活史・技術史・建築史を扱う関連博物館における展示内容の視察、②図書館における関連資料の収集、③建築家ル・コルビュジエ (Le Corbusier) の住宅作品における台所の視察、④関係専門家からの情報収集の4点を中心とした。

なかでも実見できる台所はすべて視察することを目指して、台所空間、台所設備およびそれらを中心とした水廻りや平面プランについて観察した。具体的にはル・コルビュジエの住宅作品のうち、見学可能なラロッシュ・ジャンヌレ邸 (Villas La roche et Jeanneret, 1923-5)、サヴォア邸 (Villa Savoye, 1931)、ル・コルビュジエのアパルトマン (L'appartement 24 N.C., 1931-4)、ロンシャン礼拝堂 (Notre-Dame-du-Haut, 1950-55) を訪問した。また、コルビュジエ財団が発行する関連資料を入手することができ、見学不可能なものの資料的補足が可能となった。建築・文化財博物館では、彼の住宅作品のひとつである、ユニテ・ダビタシオン (Unite d'habitation, 1945-52) の実物大模型が展示され、台所空間を実見できた。台所近代化に大きな影響を及ぼしたとされるコル

ビュジエは、機械化や合理化を建築に適用するため、家事労働や住宅設備を建築のデザインに取り入れ、台所にもそうした考え方を適用していた。「台所は神殿とはいわないまでも、家の中で最も重要な場所のひとつだ。台所も居間も人が生活する場所であるから。」(Complete works 1929-34, p.29) というサヴォワ邸に関して残した言説からも、台所のデザインを重視していたことが分かる。前川國男、坂倉準三、吉阪隆正といった彼の弟子たちをはじめとする日本の建築界をリードした建築家たちに大きな影響を与えた人物であり、その意味でも、コルビュジエの台所デザインは、台所の近代化に直接的な影響力を持っていたと言えるであろう。

さらに、キブルツ教授よりエコール・デ・ボザール (Ecole des Beaux-Arts) の Catherine CLARISSE 教授を御紹介いただいた。教授はフランスにおける台所史の研究者としては第一人者であり、台所の近代化における台所空間の規模や改良理論の適用と建築的解釈について、本研究と共通した視点でヨーロッパの台所の近代化を著されている。教授と面会でき、御助言いただけたことは、本研究にとって非常に有益なものとなった。

今回の海外派遣では、文献資料の収集、関連博物館の視察、および台所近代化に大きく影響した一人であるル・コルビュジエの住宅作品の台所の視察を通して、現地調査によってのみ可能な成果を得ることができた。今回の調査研究で得られた成果を生かし、ヨーロッパにおける台所近代化がわが国のそれにどのように影響を与えたのかという視点をもって、日本の台所近代史の研究に取り組む所存である。

出稼ぎ「農民工」の生活現状及び都市における 民俗事象に対する受容 — 広州市、東莞市における「農民工」を事例に —

王新艶

(歴史民俗資料学研究所 博士後期課程)



2013年2月18日から3月10日まで、私は非文字資料研究センターの派遣研究員として中国・中山大学非物質文化遺産研究センターを訪問し、広州における「農民工」の現状の生活と心理について調査する機会を頂いた。指導教授の劉先生、非物質文化遺産研究センター長の康先生、及びチューターなどのお蔭で、現地調査と文献資料の収集もうまくいった。

広州市は珠江デルタにおける最大の都市として、30

年前から「農民工」の出稼ぎ先となっている。中国労働社会保障省の統計によると、2010年広州市の外来農民工の数は1710万人に達した。1989年の117万と比べ、20年間で14.6倍に増えた。同じく広東省に属する「世界工場」と呼ばれる東莞市も、2012年までに外来農民工数が当地人口数の3倍余となって、523.46万人となった都市である。したがって、今回の調査は広東省の広州市と東莞市を選んだ。